

オプション教材ギンナン 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 世間では、得意なものを伸ばすか苦手なものを直すかという問いが立てられることが多い。しかし、理想は、得意を伸ばすことと苦手を直すことを両立させることだ。どちらか一方があれば、他方は自然に解消するというものではない。**2** しかし、今日の社会では、この二つの選択肢が、都合のよい形で使い分けられているところがある。例えば、苦手な勉強があった場合、「得意なものを伸ばしていけばよい」という慰め方をされることがある。**3** 逆に、得意なものが見つからない場合、「それよりもまず苦手なものをなくして将来の準備をしておくことだ」というアドバイスをされることがある。つまり、現状を打破するためにではなく、現状を追認するために得意分野と苦手分野が使い分けられているところがあるのだ。

4 その原因の一つは、早い時期から結果を求める今の社会の風潮にある。例えば、小中学校の基礎教育の期間には、本来苦手分野はあつてはならないものだ。できるだけ苦手をなくし、オールラウンドな能力を育てていくことが将来の土台になる。**5** しかし、中学受験や高校受験があつた場合、そこで問われるのは、受験する教科の出来不出来だけだ。とすれば、自然に、受験に出ない科目は苦手でも問題ないという発想になる。大学入試の場合も同じことが言える。**6** これからの社会はどの分野でも高度な知識が要求される知識産業社会になる。高校も一種の義務教育の期間になりつつあるのが現状だ。ところが、高校の学習では、小中学校よりも更に受験に影響しない教科は苦手でもよいという発想が強くなる。

7 もう一つの原因は、得意分野というオリジナリティを求めない社会の仕組みだ。大学教育は、高度な専門的知識を身につける場であるはずだ。しかし、実際には就職のための予備校か、あるいは就職の前の息抜き期間のように思われている面がある。**8** それは、これまでの社会が、社会に出る若者に、独創性よりも、従順な歯車の一つになることを要求していたからだ。それは、戦後の日本が、戦災から復興し欧米に追い付くことを大きな目標にしていたからだ。社会が一同となつて共通の目標を目指すとき必要なのは、個性ではなく馬力だったのだと言える。

9 しかし、これからの日本の未来に待っているものは、海図のない広い世界だ。欧米が未来を指し示す羅針盤を独占していた時代は既に終わっている。一方、日本には江戸時代の歴史に見られるように、これまでの西洋世界にはなかった新しい社会のビジョンが豊富に眠っている。**10** そう考えると、まず日本から新しい未来の社会を提案する時代がやってきていると言えないだろうか。そのときに大事なものは、個性に基づいた得意分野を持つ多くの人材だろう。そして、それがひとりよがりの個性でなく現実の社会に役立つ個性であるために必要なのは、幅広い基礎教養を持ち、苦手分野や弱点を持たないバランスのとれた能力だ。得意を伸ばすことと苦手を克服することの両方が同時に求められているのである。

(言葉の森長文作成委員会 M)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1日本人の社会学的認識の基盤となつてゐる連続の思考は、二者間関係に焦点をあててみると、いつそう明瞭に考察できるのである。まず、ここに、ある関係を持つ二つの個体があるとする。

2近代西欧の慣習的思考方法は、まず、二つの個体がそれぞれ独立のものであることが認識され、その両者に一定の関係が設定される。日本的思考では、いったん関係ができると、二つの個体はそれ自体個体としての独立性はなくなり、両者はつながってしまうのである。

3ここでは、個体と関係という概念の識別が明確でなくなる。前者が点と線の構成であるのに対し、後者は面の広がりである。

実際、日常生活における対人関係のあり方でも、「物事をはつきりさせる」とか、「はつきりいう」ということは好まれない。**4**「ここで、はつきりいっておきますがね」というせりふはむしろ敵意とふく

んだ排他的な位置を相手に対してとつた時に使われ、協力関係には使われない。**5**共存、協力関係にある場合、まちがつてはつきりさせようとでもすれば、「水くさい」という非難となる。

連続の思想は個体を独立させて識別することに對して大きな抵抗をもつ。「甘え」が可能なのもこの連続の思想があればこそであろう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

6このような個体の結びつきというものは、二者の場合においてのみ理想的にいく可能性をもっている。というのは、この状態の実現には、第三者の要素をもちこまないで、その二つの個性のもっている要素を素材として形成されるからである。**7**要素によつてお互いに相手のものを受け入れ、相手に譲歩することによつて成立する性質のものであるから、第三者を入れるということは、問題を複雑にし、その成立の可能性をぐつと低めてしまう。**8**実際、日本人の人間関係は、すべてこの特定の三者間の関係を基盤として成立しているといえよう。

この関係の累積が集団の組織となつてゐる。ということとは、集団成員の大部分の者は、何人かとそれぞれ独立に第三者を入れない二者関係をもっていることである。

9このことはすでに「タテ社会」の理論の中で指摘したことであり、タテ組織は実にこの二者間関係の累積、あるいは延長によつて構築されているのである。**0**

(中根千枝「適応の条件」講談社現代新書による。)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 アメリカの共和党は保守、民主党はリベラルだとされている。アメリカの選挙民は、遠い昔から、保守主義とリベリズムから二者択一をせまられてきた。

2 市場を万能視し、自助努力と自己責任を徳目としてかかげ、「小さな政府」を志向し、ゆえに低福祉低負担をよしとするのが、保守主義の経済政策を支える基本理念にほかならない。**3** 他方、市場は不完全であるとしたうえで、経済安定化と不均衡是正のためには、不完全な市場への政府の介入は欠かせないとし、ガルブレイスのいう「賢明なる社会活動」のためには、高負担をやむをえないとするのが、リベリズムの経済政策を支える基本理念である。

4 相対的であれ絶対的であれ、保守主義者は市場主義の立場にたつ。ハイエクにならつて、「政府の市場介入は害あって益なしだ」と保守主義者はいう。**5** 他方、リベラリストは、ケインズの教えにしたがい、「市場が効率的な資源配分をかなえる」という、新古典派経済学（市場主義）の金科玉条に疑義を呈し、財政金融政策をもちいての政府の市場介入なしには、失業、インフレ、貿易赤字などの「不均衡」は解消されないし、不安定な景気変動はさけがたいとする。**6** 要するに、すべての問題の解決を市場にゆだねておけば、最適な答えをだしてくれるというのが保守主義者、不完全な市場への政府の介入が不可欠であるとするのがリベラリストなのである。

7 以上は、市場経済の仕組みにかんする、保守主義者とリベラリストの認識の差異―いづれが真か偽かを「科学的」に判定することは不可能である―に由来する、価値判断の入りこまない両者の見解の相違である。**8** 保守主義者とリベラリストがいたく経済観の差異、ないし望ましい政策についての意見の不一致の大方は、市場の仕組みにかんする両者の認識の差異に由来するのではなく、両者の理念（イデオロギー）の差異に由来するのである。

具体例を一つあげてみよう。失業は、労働市場における需給の不均衡にほかならない。**9** なぜそのような不均衡が生じるのかというと、名目賃金が下方硬直的だからである。労働の需給を均衡させると、名目賃金がちやんと下がりさえすれば、「市場の力」により、失業はおのずと解消されるはずである。ここまでは、保守主義者とリベラリストの見解は一致する。**10** 両者の見解の差異は、そこから先において生じるのである。

（佐和隆光「保守とリベラルの対立軸」より）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34